

井上円了と近代人の神

哲学宗のバイブルをめぐる試論

岡田正彦

okada masahiko

一、井上円了と「哲学上に於ける余の使命」

大正八年（一九一九）、中国、満州の巡講に赴いた井上円了は、大連での公演中に脳溢血で倒れて逝去した。しかし、同年の二月に『東洋哲学』（第二六編第二号）誌上に掲載された「哲学上に於ける余の使命」のなかで、円了は近い将来に、哲学堂（道徳山哲学寺）を本山とする「哲学宗」を組織し、哲学宗の「バイブル」を編纂して「哲学」を一般に普及するという壮大な計画を披瀝している。

この小論のなかで、円了が哲学上に於ける自分の使命として強調しているのは、次の二カ条である。

- 一、哲学を通俗化すること
- 二、哲学を実行化すること（一）

第一の使命とされる哲学の通俗化のために、最初に円了が取り組んだのは教育事業と著作活動であった。本人

の回想を辿ってみよう。

先づ第一の使命たる哲学を通俗化することは、余が前半生の事業にして、其間の著書と教育が正しく之に當つて居る、而して其中心は哲学館である、其創設の主旨は哲学を世間に普及するにありて、最初は飽まで通俗本位なりしも、時の勢に誘はれ風潮に動かされ、自然に高尚に傾くやうになりて、遂に大学専門科までを開設するやうになつて来た、然し實際に於ては哲学を通俗一般に普及する目的だけは達したと思ふ、其上に哲学館より発行したる講義録や著書が此普及の旨趣を助けたに相違ない、然のみならず、余は明治二十三年より十年以上哲学館拡張の名義の下に全国各県各郡を歴遊して、哲学の通俗講話をなしたるは、確かに此目的を達し得たと信じて居る。

哲学館（現在の東洋大学）の設立や多くの講義録・著書の出版、全国各地での啓蒙的な講演活動などが、哲学を一般の人々に知らしめる「通俗化」の活動であつた。

一方で、第二の使命とされる哲学の「実行化」は、哲学堂の建設・拡張・運営や修身教会運動といった、後半生のユニークな啓蒙活動に反映されている。これも円了自身の回想を紹介しよう。

次に第二の使命たる哲学を実行化することは、老後半生の事業にして、明治三十九年退隠以後之に取掛り、其中心は和田山哲学堂と定めて居る、西洋の哲学は理論一方に偏して実行方面を疎外せる有様であるが、是れ哲学の目ありて足なき不具者（ママ）にしてイザリ哲学（ママ）たるを免れぬ、然るに余は哲学の極致は実行

にありと信じ、向上門内に向下の一道を開達するを己れの理想とし、哲学の定義を下して奮闘哲学の学とし、之を実行上に実現せんことに専ら工夫を凝らして居る、而して此点は西洋哲学の唱道せざる所なれば、余は教外別伝の哲学、西哲未発の新案と名けて置く⁽³⁾。

ここで強調されている「奮闘哲学」、「西哲未発の新案」、「教外別伝の哲学」といった表現や「向上門・向下門の哲学」といった概念は、とくに晩年の著作に頻繁に使われている。前半生において一般社会に普及してきた「哲学」を実行化することが、円了の後半生の事業であった。

第一の使命である哲学の通俗化と、第二の使命である哲学の実行化を明確に区分し、それぞれを自身の前半生と後半生の事業の特色とする説明の仕方は、晩年の境地から自らの生涯の活動を図式化したものである。しかし、円了の前半生の事業と後半生の事業の分断には、哲学館事件やその後の神経衰弱といった偶発的な出来事も大きな役割を果たしており、円了が若年の頃から後半生の事業の展開を想定して、前半生の事業を進めていたかどうかは明確ではない。

とはいえ、少なくとも晩年の円了にとって、前半生の哲学の通俗化と後半生の哲学の実行化は、決して分断された事業ではなくむしろ段階的な事業であった。前半生の事業と後半生の事業の関係について、円了自身は次のように述べている。

若し此二大使命中の軽重を較すれば、余は第二に重きを置いている、即ち第一は方便にして第二は真実である。第一は準備にして、第二は目的であると信じて居る、余の如き小人格のものを釈迦や日蓮の大人格に対

照するは、僭越の極であるけれども仮りに比較を取れば、老前半生の第一使命は爾前の法門、又は佐前の法門に比すべく、老後半生の第二使命は爾後の法門、又は佐後の法門に比すべきものである(4)。

円了にとって、第一の使命と第二の使命は連続していると同時に、佐渡への流罪を分岐点とする日蓮の思想のように、大きな転換を経て段階的に深化された思想の分類であった。晩年の円了が過去の人生を振り返ったときに、はじめてこれらの「二大使命」の違いを意識したのか、それとも彼はかなり早い時期から後半生の事業を意識していたのだろうか。

筆者は、これまで晩年に披瀝された「哲学宗」の構想を中心に、円了の後半生の事業の意味を前半生の事業と関連づけながら考察し、円了の一貫した近代的価値観への憧憬が、世界旅行の経験や憲法の制定、哲学館事件といった社会変動や偶発的事件と連動して、独特な後半生の事業に結実していった、という見取り図を示してきた(5)。

また、哲学堂の建設や修身教会運動といった後半生の円了の活動は、「哲学宗」という枠組みを通して捉えると、かなり理解し易くなるのも確かである。近代合理主義的な価値観は、それによって人々の生活習慣や日常的な意識が変革されたとき、はじめて実効性が生じる。新しい知識が一般に広がるだけでは、現実は何も変わらない。「哲学」がある種の宗教として普及し、人々の生活規範として定着したとき、はじめて近代的な価値観としての哲学は、新しい社会を支える力になりえるのである。

晩年の円了は、次のような力強い言葉で自らの決意を表明する。

今日は第二の使命を実現する土台を築く最中であって、全国一巡の半途になつて居る、此巡遊の目的には二様の意味がある、其一は地方の民情人心を視察して哲学実行化の参考とすること、其二は哲学堂の経営を完成し、其維持法を確立することである、今や明治三十九年より十三年間に於て全国七分通りを巡了したれども、残りの三分を巡了するに猶ほ五六年を要する割合である。愈々他日巡了の後には、哲学堂に立籠り、毎日來集する人々に対し、哲学宗の宗意を説法すると同時に、哲学宗のバイブルに當るべき教書を編纂するつもりである、其編纂を終りたらば、全国の同志を集めて教団を組織して見たいと思ふ、其前に哲学堂庭園前に不読学舎を建て、同志を集め、哲学の実行化を練習せしむることを予定して居る、是等は余が今後の課程である(6)。

ここで披瀝された「哲学宗」の構想は、円了が大連への講演旅行中に逝去したため実現されることはなかった。しかし、「哲学宗」の普及活動は、井上円了の生涯の活動の集大成として構想された事業であり、第二の使命の重要性を強調する円了の決意を見れば、決して一時の思いつきとして一笑に付すことはできないだろう。本稿では、これらの構想のなかでも、とくに「哲学宗のバイブル」について考えてみたい。

二・哲学祭と四聖のテキスト―向上門のバイブル―

「哲学宗」の構想自体は、最晩年の論考で披瀝されているが、円了はかなり早い時期から哲学を祭る「哲学祭」を挙行している。現在も哲学堂で毎年挙行されている哲学祭を円了が最初に行ったのは、東京帝国大学を卒業した明治十八年(二七才)のことであった。このあと、円了は前半生の事業とする著述活動や教育活動を積極的に

展開し始める。

第一回の哲学祭挙行に際して、円了は画工に依頼して作成した四聖の画を掲げ、祭文を奏上した。この後も、継続的に「哲学祭」を挙行している。少し長くなるが、哲学館の講義録の一部として出版された「哲学祭記」（明治二十七年）から、ある年の「祭文」を見てみよう。

後学円了謹テ四聖ノ尊像ヲ講堂ニ掲ケ大学中庸論語易経法華浄土三部経瑣克刺底伝記純理批判哲学各一部ヲ其前ニ供シ仰テ尊容ヲ拝シ俯シテ遺教ヲ思ヒ以テ先聖釈迦孔子瑣克刺底韓圖ノ四大家ヲ祭ル釈迦ハ印度哲学ヲ代表シ孔子ハ支那哲学ヲ代表シ瑣克刺底ハ希臘哲学ヲ代表シ韓圖ハ近世哲学ヲ代表ス故ニ四聖其人ヲ祭ルノ意ハ哲学其物ヲ祭ルニアルヲ知ルヘシ夫哲学ハ一種ノ別世界ニシテ其中ニ天地アリ日月アリ風雨アリ山海アリ釈迦ノ智ハ其所謂日月ナリ孔子ノ徳ハ其所謂雨露ナリ瑣克刺底ノ識ハ其所謂山岳ナリ韓圖ノ学ハ其所謂海洋ナリ其智ハ我ヲ照シ其徳ハ我ヲ潤シ其識ハ我ヲ護シ其学ハ我ヲ擁シ我父トナリ我母トナリ日夜我ヲ愛育撫養セリ是ヲ以テ不肖円了等幸ニ哲学界ノ一人トナルヲ得タリ我輩豈報謝セサルベケンヤ（中略）是レ不肖円了等カ先年ヨリ年々哲学祭ヲ設ケテ其学ノ将来益振起発達センコトヲ祈ルノ微志ニシテ即チ四聖其人ヲ祭ルハ哲学其物ヲ祭ル所以ナリ云々。

哲学祭の目的は、四聖の霊や人を祭るのではなく、「哲学其物ヲ祭ル」ことにある。

四聖とされる釈迦・孔子・ソクラテス・カントは、それぞれインド哲学、中国哲学、ギリシア哲学、近代哲学という思想潮流を代表する人々であるが、これらの人々が崇拜対象になっているのではなく、彼らの営みによつ

て探求された真理——乃至は真理の探求の営み——こそが、祭られるべきものなのである。後に建設された哲学堂には、天井の中央から広がる真理の光を媒介するように、四聖の名を記した額が四方に掲げられ、ここで今日に至るまで哲学祭（哲学堂祭）が挙行されている（8）。

祭文によれば、四聖の像（画）の前には「大學中庸論語易経」や「法華浄土三部経」、「瑣克刺底傳記」、「純理批判哲学」といった四聖に関わる書物を「各一部」供するとされている。これらのテキストは、円了が構想していた哲学宗のバイブルに深く関わることは間違いないだろう。

また、ここで引用した哲学祭の「祭文」が朗読される少し前、明治二二年（一八八九）の年末に伊豆修善寺の温泉宿に宿泊していた井上円了は、夜更けに思索をめぐらすうちに星界を旅行し、異世界を巡るという奇妙な体験をする。翌年、円了はこの想像上の旅の記録を一冊にまとめ、『星界想遊記』と題して刊行した。最初の世界旅行から帰国した円了が、憲法の制定と議会開設の機運が高まる情勢のなかで著述した本書の意義については、すでに小論を發表している（9）。

この興味深いテキストのなかで、異世界への夢中の旅路の果てに円了は「哲学界」を訪れ、そこで四聖に出会う。このとき、四人の聖者はそれぞれに、円了に対して「本土」（円了の生きる現実世界）において果たすべき使命を与える。

まず釈迦は、円了に次のような使命を託した。

「われ、汝に依嘱することあり。われ、かつて汝の本土にありて法を説き、不生不滅の涅槃界あることを示したるに、その後の衆生、生死の義務を尽くさずして、ただちに涅槃界に至らんと願うものあり。これ、因な

くして果を求むるもの。いづくんぞその目的を達するを得んや。実に汝の世界は苦界なり、しかれども、その苦はすなわち楽界に達する道なり。請う、汝記せよ、苦は楽岸に達する舟なることを。いやしくも涅槃界に生ぜんとする志あるものは、勇猛精進を守り、決して懈怠すべからず。汝もし本土に帰らば、請う、われに代わりて衆に告げよ。」

さらに孔子（孔夫子）は、円了に次のような使命を与える。

「われ、汝の本土にありしとき、世道人心の治まらざるを見て、修身齊家の道を講じ、仁義道德の大本を説きしが、その後、人民私利に走り小欲に汲々として、大道を忘れるに至れり、これ、実に道德の罪人なり。汝、わがために記憶せよ。道德の家には幸福の園池あることを。人、若し幸福の園池に遊ばんと欲せば、必ず道德の家に入るべし。汝、もしその土に帰らば、必ずわれに代わりて、この言を衆人に伝えよ。」

ソクラテス（瑯夫子）が託した使命は、次のようなものであった。

「われ、汝の世界にありしとき、時弊を矯正せんと欲し、知徳の本体を明らかにして、これを研脩するの必要を説けり。汝、よろしくわがためにその道を広むべし。」

最後にカント（韓夫子）は、次のような使命を円了に託する。

「われ、世の学者の論みな一方に偏する弊あるを見て、これを総合対照し、中正完全の哲学を起こせり。汝、よろしくわが志を継ぎて、今日の学弊を矯正すべし。」(10)。

もちろん、この奇妙な体験はフィクションであろう。しかし、哲学の通俗化から実行化へと移行する円了の後半生の活動を考えれば、内的体験としてのこの四聖との出会いは、かなり重要な意味を持っていたのではなからうか。ここで披瀝されているのは、円了による四聖の思想の理解であり、彼らの思想のエッセンスの要約である。円了は、自らが体得した四聖の哲学をもとに生き、彼らに与えられた使命——あるいは、円了が四聖のテキストから感得した哲学——を実践しようとしたのである。

先に述べたように、円了は哲学宗のバイブルの編纂と並行して、哲学堂に「不読学舎」を建てて哲学の実行化を推進する構想を持っていた。四聖関連の書物を哲学宗のバイブルに取り入れるにしても、これは各思想のエッセンスを抽出したような内容になっていてはならないだろうか。

少なくとも、各テキストが原書で使用されることはなかったはずである。円了は、しばしば一般の哲学を「死学」として批判し、「死学革新」のためにあらゆるテキストを和訳することを奨励した。

とくに、ヘブライ語からギリシア語やラテン語に翻訳され、さらに各国の「普通語」に翻訳されることによつて、世界中で読まれるようになったキリスト教の聖書と仏典の事例を比較し、「これ(キリスト教のバイブル)に仏教を比較すればかのヘブライ語はサンスクリット語に当たり、ラテン語は漢文に当たり、近世語は日本現在の普通文に当たるわけである。ただいまにてはサンスクリットの原本は和漢共に用いざるも、漢文の経典は各宗こ

とごく用いている。これだけは全廃したいものである(11)と明言し、さらには、次のような極論を展開している。

むかしシナにインドより仏教の伝来せしときは盛んに訳経が行われ、すでに訳し終われば、サンスクリット語の原本は焼き尽くしたということだ。これは実にその当時の活眼であって、原本を残しておけば、いたずらにこれを学ぶものができてくる。もし焼き捨ててしまえば、かかる死学をするものはなからう。わが国にても各宗合議の上、委員を設けて仏書の和訳に着手し、すでに訳し終わらば、原本を没収するようにしてもらいたい(12)。

円了にとっては、難解な原書を判読することよりも、各思想の本質的な内容を身につけることが重要なのである。四聖のテキスト自体は、哲学祭の祭儀に供されることはあっても、そのまま人々が日常的に手に取るバイブルにはならないだろう。このため、四聖関連の書物に代表される「向上門の哲学」のエッセンスを身につけると同時に、哲学を実行化するための「向下門の哲学」の実践が重視されることになるのである。

三、哲学宗の実践と唱導テキスト―向下門のバイブル―

円了の提唱する「向上門の哲学」と「向下門の哲学」の表裏一体の関係を具現化した場所が、哲学堂(四聖堂)を中心とする哲学堂公園であった。このユニークなテーマパークを円了の思想を表象した、一つのテキストであると見なせば、この公園自体が「不読学舎」で拝読されるバイブルの一つである、と考えることも不可能ではな

いだろう¹³。

先にも述べたように、哲学堂公園内に建てられた「哲学堂（四聖堂）」の天井中央には、真理の源を象徴する天蓋を囲んで四聖の名を記した額が四方に掲げられ（向上的本尊／理想的本尊）、その直下に「向下的本尊（実際の本尊）」として、「南無絶対無限尊」と刻した石柱が置かれている。

この石柱は、「南無絶対無限尊」と反復唱念するために設置されたもので、その唱念法にはつぎの三様がある。

誦昌＝声を発して南無絶対無限尊を唱ふ。

黙昌＝口を塞ぎて南無絶対無限尊を唱ふ。

黙念＝目を閉ぢて南無絶対無限尊を念ず。（14）

円了によれば、「哲学の極意は、理論上宇宙真源の实在を究明し、實際上其本体に我心を結託して、人生に樂天の一道を開かしむること」にある。この実在あるいは本体を名づけたものが「南無絶対無限尊」なのである。

この唱念法に付帯して、円了は二十五首の唱念法和讃を考案した。

世の哲学をながむるに、議論の花は開けども、未だ一つの応用の、実を結ばぬは遺憾なり。

高嶺の月を知らずして、麓の道に迷ひつゝ、有無の詮議に日を送る、こは哲学の時弊なり。

人の心の渡るべき、道を示さぬ哲学は、向上ありて向下なき、不具の学と名くべし。

向下門の哲学は、向上門の究竟理を、実践躬行する道を、教ゆることに外ならず。

斯る真理を世の人に、示して実行せしむるは、多くの道のある中に、唱念法こそ至要なれ。

唱念法は口に只、南無絶対無限尊、唱ふる外に何事も、勤め行ふ用はなし。

賢恵利鈍の隔てなく、唱ふるのみで安心の、岸に達する道なれば、捷徑中の易行なり。

南無絶対を唱ふれば、迷いの雲は晴れわたり、暗き心も忽ちに、光のみつる心地する。

南無絶対を唱ふれば、・・・

以下、「南無絶対」と唱えることの功德を列挙して、最後は「斯る理屈を離れたる、唱念法の立て方は、教外別伝西哲の、唱道せざる教えなり」と結んでいる(15)。

さらに円了は、この唱念法和讃とは別に、哲学宗のエッセンスを平易に述べた「哲学和讃」をつくっている。このような和讃は、さまざまな文献に散見するが、晩年の著作のひとつである『奮闘哲学』(一九一七)のなかで、「自ら案出せる哲学的宗教を述ぶるに当たり」、「余の哲学的宗教の大体をうかがう」ことを可能にするものとして、第一首から第五十首までの哲学和讃が列挙されている。

第一首 人類ありし始めより、 知恵の林におもむろに、

栄えてここに哲学の、 花の開くる世となりぬ。

第二首 広き世界に哲学の、 起こりし源を尋ぬるに、

月日は定かならざれど、 四千年余も前ならん。

第三首 四千余年のそのむかし、 東西洋の区別なく、

人の心の泉より
哲理の水は湧きだせり。

第四首 太古時代の原人が、
天を仰ぎて不可思議の、

感にうたれしそのときは、
哲学界の曙光なり。

第五首 人と獣とを区別する、
道にいろいろあるなれど、

哲学思想のあるなしを、
その一点に数うべし。

第六首 広大無辺の哲学は、
大は宇宙の極度より、

小は微塵の末までも、
論じ尽くして漏らすなし。

中略

第四十五首 南無絶対と南無阿弥と、
唱うる声は異なれど、

悟り上げたる境界は、
同じ高嶺の月を見る。

第四十六首 かかる信念持つ人は、
普通の宗と異なれば、

哲学流の宗教を、
信ずる人と名付くべし。

第四十七首 信じて仰げば絶対の、
体より放つ真善美、

その光明に照らされて、
人の心は神となる。

第四十八首 神と仏の实在を、
信の眼によらずして、

知恵に照らして探らんと、
思う人こそ愚かなれ。

第四十九首 人文進める今の世に、 知恵のみありて信のなき、

不具の人のできたるは、 哀れむべきの至りなり。

第五十首 かかる道理を明示して、 人のまことの信仰を、

与うるものは哲学の、 賜物なりと感謝せよ。(16)

ここに五十首すべてを記載する紙幅はないが、前後の各数首を見るだけでも、ここに円了の哲学宗のエッセンスが凝縮されているのを感じる。向上門の多彩なテキストに表明された、人類の叡智のエッセンスをこうした平易な和讃に凝縮することで、円了は哲学の理想を広く世界に発信するばかりでなく、人々の生活に根付かせようとしたのである。

円了とともに「不読学舎」に学ぶ人々が、哲学堂公園を散策しながら口々にこれらの和讃を暗唱し、しばしば演繹観（哲学堂公園内に設けられた休憩所の一つ）などで小休止して、さまざま議論に花を咲かせている姿を想像すると、何だか楽しくなってくる。

このほかに、円了は法然の「一枚起請文」に模した哲学の起請文や蓮如の「白骨の御文」や「改悔文」に擬えた文章をつくっている。これらも、不読学舎で暗唱されるテキストの候補であることは間違いないだろう。円了の哲学起請文は、次のようなものだ。

和漢西洋のもろくの学者たちの沙汰し申さるゝ哲学の学にもあらず、又学問により諸家の書を読み尽くして唱ふる哲学にもあらず、只忠君愛國の為に奮闘努力すれば、疑ひなく人生の本務を尽くし得ると心得て活

動する外には、別に子細候はず、たゞし宇宙觀人生觀など、申す事の候は、皆決定して奮闘努力すれば人生の本務を尽くし得る内にこもり候なり、此外におくふかき事を存ぜば、却て哲学の本旨にはずれ、人生の目的にも違ふべし、哲学を行はん人はたとひ古今の哲学を悉く学ばずとも、一文不知の愚鈍の身になり、田夫野人の無知のともがらに交はり、学者の振舞をせずして、唯一向に活動すべし(17)。

一見すると悪ふざけのように感じるこの文章も、暗唱することによって円了の哲学を生活に生かすテキストだと考えれば、決して一笑に付すことはできないだろう。円了は、向上門の哲学と向下門の哲学の関係について、次のように簡潔にまとめている。

哲学の向上的方面は、帰するところ宇宙の本体たる絶対に至りてとどまる。この絶対を向下門に開きたらば、直ちに宗教となつて現れてくる。ただしこれを宗教とするには、その絶対が大活物となり、真善美の光を放ちて、吾人の精神界に現前するようになるを要す。これは到底知識の眼で見ることができぬ。必ず信仰の眼にてうかがわねばならぬ。すなわち知識の眼にて採り得たる絶対の本体が、信仰の眼の前に慈知の光明を放ちて現見するのである。余はその体を名付けて絶対無限と名付けておく(中略) この絶対無限尊が実に哲学的宗教の本尊である(18)。

この哲学的宗教は、人々の生活に根付くことによつて新たな社会を支える力になる。このため、円了はさまざまな社会改良についての提言も行なつた。たとえば、仏式結婚式の普及による婚礼の改良案などは代表的な事例

の一つだろう。

円了は、「仏は決して死人の看護者ではない」し、「仏教は決して死後に限る教えではない」として、旧来の神仏分業の考え方によって定着してきた風習を改良しようとし、婚礼を寺院で行うことを提案する。寺院の鐘を合図に式次第が進行し、仏前での読経や念珠の交換、焼香などを中心に行われる婚礼の儀式や多彩な井上円了の社会改良の営みについては、また稿を改めて議論をしたい。

ただ、哲学宗のバイブルに関連する部分で興味深いのは、円了が仏式結婚式と並行して提案している「教育式結婚式」において、仏前での読経のかわりに、「御真影」を前にした「教育勅語」の奉読を提唱していることである(19)。

円了による哲学の実行化や社会改良の活動には、当時の国家の体制がつねに色濃く反映されている。もし、円了が大連で逝去していなければ、哲学宗のバイブルと「教育勅語」や「戊申詔書」のような文書との関係はどのようなものになっていたのだろうか。円了の逝去によって頓挫した哲学宗の可能性を考える場合には、やはりこうした課題も避けて通ることはできないだろう。

四・哲学宗のバイブルと近代人の神

哲学堂(道徳山哲学寺)を本山とする哲学宗の教団を組織し、哲学宗のバイブルを編纂して哲学宗を人々に普及するという円了の構想は、結局実現されることはなかった。はじめに紹介した「哲学上に於ける余の使命」の末尾で、哲学宗の構想を披瀝した円了が、「但し天が果して之を遂行し得る年寿を余に与ふるや否やは計り知ることが出来ぬ、只人事を尽くして天命を待つ覚悟である」(20)と述べているのは、自らの運命を感じていたのであ

ろうか。

ただし、これらの構想はまったく荒唐無稽な夢想ではなく、むしろ円了の生涯の活動の集大成として計画された事業であった。哲学堂の建設や拡張、修身教会の組織化、多彩な社会改良活動など、哲学宗の基盤となる事業はすでに着々と進められていた。本稿では、哲学宗のバイブルに焦点を当てて哲学宗の構想について考察したが、「不読学舎」で日常的に暗唱する哲学宗のバイブルについては、かなり具体的な準備がなされていたと言えるだろう。

これは推測の域を出ないが、哲学堂（四聖堂）の構造が、向上門と向下門の哲学を表裏一体としているように、もし円了の構想が実現されていれば、哲学宗のバイブルも緻密な研究用の「向上門のバイブル」と、日常的に暗唱する「向下門のバイブル」を表裏一体にした教書として編纂されたのではなからうか。

円了は、自らの真宗信仰と哲学宗の関係について、次のように告白している。

余の信仰に就て一言して置きたい、其信仰を自白すれば、表面には哲学宗を信じ、裏面には真宗を信ずるものである（中略）哲学宗の立て方を裏面より眺むれば忽ち真宗となりて現われて来る、もとより真宗に限るといふ訳ではない、一つの哲学宗が裏面の眺め方によりて、禅宗ともなれば浄土宗ともなり、真宗ともなれば日蓮宗ともなる、其中余は生来の因縁により、幼時に信仰の根底を真宗の地盤に植付けてあるから、我心眼の前には真宗となつて現はるゝのである（21）。

近代世界の新しい価値観Ⅱ真理の絶対性を前提として、あらゆる個人の信仰の主体的選択を許容する円了の「哲

「哲学宗」は、ほぼ一〇〇年前の宗教論というよりは、むしろ個人の主体的な選択を基盤として多元的な価値観を尊重する、現代世界に生きる人々の信仰のあり方を予見した議論と考えることもできるだろう。チャールズ・テイラーが、『今日の宗教の諸相』（二〇〇二年）のなかで、一〇〇年前のウィリアム・ジェイムズの講義を過去一〇〇年間の近代宗教史の言説を踏まえて再評価したように、円了の哲学宗を同時代人として批判的に検証する姿勢も必要ではなからうか⁽²²⁾。

「哲学宗」の構想は夢に終わったが、井上円了の生涯にわたる思想的営為を理解するためには、こうした晩年の構想を無視することはできない。

近代仏教思想の歴史的展開をまとめた『明治の新仏教運動』（昭和五一年）のなかで、池田英俊は、井上円了を「国粹主義の勃興期に仏教の哲学的形成を目ざして活躍した（明治）二十年代の代表的な仏教啓蒙家の一人」と位置づけ、さらに「円了の思想活動の高く評価される時期は、明治十八年の東京大学卒業前後から、日清戦争の勃発する同二十七年の『仏教哲学系統論』が出版されるまでの十年間であった」と限定したうえで、円了の言論活動や著述活動について論じている。そこで強調されているのは、「宗教の価値を哲学・理学の真理との一致に求め、近代合理主義に合致する」新時代の宗教として、「仏教」を改良する円了の姿勢である⁽²³⁾。

たしかに、円了の初期の代表作である『仏教活論序論』（明治二〇年）などには、新時代の宗教として、仏教を改良する意識が強く感じられる。しかし、この場合にも重視されているのは近代的「哲理」であって、仏教はこの近代的「哲理」と合致する限りににおいて、新時代の宗教としての価値を有するのである。また、明治三十六年の修身教会設立の趣意書などの論調を見れば、後の時期になればなるほど、円了は仏教を改良することよりも、国民の啓蒙と新しい国家の枠組みの実現——社会と人々の意識の近代化——を優先するようになっていく。

「宗教の価値を哲学・理学の真理との一致」に求める円了の宗教論は、これまで仏教思想の合理的側面を強調し、宗教の価値を相対化する「哲学仏教」の営みとして、個人の内的信仰の確立を重視する「近代的信仰」の前段階に位置づけられてきた。しかし、後半生の円了の思想にも新たな光が当てられて行くべきだろう。

円了にとって「哲学」の価値は相対的ではなく、むしろ絶対的であった。少なくとも後半生の円了の活動を見るかぎり、円了の本来の目的は、宗教的価値を合理的に再解釈することではなく、近代的な自然観や合理的思考法を究極の価値基準として、さまざまな宗教思想を再評価することにある。

さらには、至上の価値としての近代的思惟が、理想のユートピアとしての近代社会の実現と結びつけられるとき、啓蒙思想は新時代の新たな宗教として、人々の生活様式を規定する規範になる。さまざまな宗教思想は、この新たな規範と矛盾しない限りにおいて、近代社会においても存在する価値を認められるのである。

こうした円了の宗教論は、国家神道体制のもとで宗教の自由を認めた、戦前の日本社会における宗教の位置づけとも重なる部分がある。円了の啓蒙活動に見られるような、ユートピアとしての近代国家を理想化する愛国主義のエネルギーは、資本主義の行き詰まりや近代社会の矛盾が露呈しはじめると、次第に超国家主義の方向へ捻じ曲げられていく。天皇を中心とした近代国家の体制を神聖化する、戦前の日本の社会システムの成立過程を考察するうえでも、円了の哲学宗の構想は興味深い題材だと言えるだろう。

本稿では、哲学宗のバイブルを推定する作業しかできなかったが、円了の生涯の活動のなかに、哲学宗の教団組織や活動内容を類推する材料は多く残されている。これからも少しずつ、落穂拾いを続けていきたい。

【註】

(1) 井上円了「哲学上に於ける余の使命」『東洋哲学』第二十六編第二号、大正八年二月、八四頁。

(2) 同右書、八四頁。

(3) 同右書、八五頁。現在では不適切な表現も見られるが、原文を尊重した。(ママ)は、筆者による。

(4) 同右書、九二頁。また、円了は次のような図式によつて、自らの生涯の事業を簡潔にまとめている(同書、九一〜九二頁)。

○第一の使命たる哲學の通俗化

(一) 哲學館を中心とす、

(二) 學校教育を方法とす、

(三) 老前半生の事業とす、

(四) 教育の恩に報謝する經營とす、

○第二の使命たる哲學の実行化

(一) 哲學館を中心とす、

(二) 社會教育を中心とす、

(三) 老後半生の事業とす、

(四) 社会の恩に報謝する經營とす。

(5) これまでに、筆者はこの課題に関連して以下のような論文を発表してきた。

岡田正彦「自己同一性のための他者―井上円了の「妖怪学」と近代的宗教意識」『近代仏教』第一号、日本近代仏教史研究会、二〇〇四年。

岡田正彦「哲学堂散歩―近代日本の科学・哲学・宗教」『佛教史学研究』第四八卷第二号、佛教史学会、二〇〇六年。

岡田正彦「井上円了と哲学宗―近代日本のユートピア的愛国主義」京都仏教会監修『国家と仏教 上巻』法蔵館、二〇〇八年。

岡田正彦「近代日本のユートピア思想と愛国主義―井上円了『星界想遊記』を読む―」『井上円了センター年報』第二〇号、二〇一一年。

- とくに『井上円了センター年報』第二〇号に掲載した論文では、最初の世界旅行から帰国した円了が抱いていた、憲法制定や議会開設期における新しい社会への期待感と、円了の思想的転回の関連性を強調している。
- (6) 前掲、井上円了「哲学上に於ける余の使命」九三頁。
- (7) 井上円了「哲学祭祀」『哲学館第六年度講義録』哲学館、明治二十七年、五〇七頁。円了によれば、この祭文は一八九七年度の哲学祭において朗読したものである。
- (8) 哲学堂内の形状については、前掲、岡田正彦「哲学堂散歩―近代日本の科学・哲学・宗教」六九〇七〇頁を参照のこと。哲学堂公園については、三浦節夫「井上円了と哲学堂公園一〇〇年」『井上円了センター年報』一一号、東洋大学井上円了記念学術センター、二〇〇二年が詳しい。また、哲学堂公園のガイドブックとしては、東京都公園協会監修の前島康彦『哲学堂公園』（郷学舎、一九八一年）がある。
- (9) 前掲、岡田正彦「近代日本のユートピア思想と愛国主義―井上円了『星界想遊記』を読む―」を参照のこと。
- (10) 井上円了『井上円了選集 第二四卷（星界想遊記）』学校法人 東洋大学、二〇〇四年、六二〇―六三三頁。
- (11) 井上円了『井上円了選集 第二卷（奮闘哲学）』学校法人 東洋大学、一九八七年、四二八頁。
- (12) 同右書、四二八―四二九頁。
- (13) テクストとしての哲学堂公園の解説については、二〇一四年にドイツのマールブルグ大学で「The Role of Architecture in the Study of Modern Japanese Religions」と題する発表を行なった。本発表の内容は、近日中に天理大学とマールブルグ大学の共同出版本に掲載予定である。
- (14) 石川義昌編『哲学堂』財団法人哲学堂事務所、昭和十六年、一七〇―一八頁。
- (15) 前掲、井上円了「哲学上に於ける余の使命」八七―八九頁。
- (16) 前掲、井上円了『井上円了選集 第二卷（奮闘哲学）』四三三―四三九頁。
- (17) 前掲、井上円了「哲学上に於ける余の使命」八五―八六頁。
- (18) 前掲、井上円了『井上円了選集 第二卷（奮闘哲学）』四三九―四四〇頁。
- (19) 同右書、三七〇―三七二頁。
- (20) 前掲、井上円了「哲学上に於ける余の使命」九三頁。
- (21) 同右書、九〇―九二頁。
- (22) チャールズ・テイラー『今日の宗教の諸相』岩波書店、二〇〇九年。

(23) 池田英俊『明治の新仏教運動』吉川弘文館、昭和五十一年、二二七頁、及び二四六頁。

* 哲学祭、哲学堂、哲学和讃などについては、円了は同じような文章を多方面に重ねて書き遺している。煩雑さを避けるために、本稿では引用をなるべく『井上円了選集』所収の文献及び「哲学上に於ける余の使命」からに限定し、表記もこれらに依拠した。